P1-2.
がん化学療法施行患者の心理状態に関する検討

（臨床腫瘍科）
○横山　智央
（内科学第一）
大屋敷一馬
（精神医学）
村越　晶子、飯森眞喜雄
（外科学第一）
池田　徳彦
（社会人大学院2年内科学第一）
大里　洋一
（薬剤部）
宮松　洋信

がん患者の精神症状は予後に関与する因子として近年注目されてきている。しかしながら、これまで外来化学療法を受けている患者の精神症状に関する現状を調査した報告はほとんど無く、わが国における外来化学療法患者の精神的苦痛の問題点を明らかにする事は重要である。今回、我々は当院外来化学療法センターに通院中患者194人を対象に、うつ性自己評価尺度SDS（日本語版Self-rating Depression Scale）を用いて評価を行い、がんの種類・病期・罹患期間による関連性について検討を行った。当院外来化学療法センター通院患者において、適応障害（疑）は84人（43.3%）、うつ病（疑）は14人（7.2%）に認められたが、これら発症に性差・臓器差・罹患期間・病期差で明らかな有意差を認めなかった。また、抗不安薬は18人（9.3%）、抗うつ薬は2人（1.0%）、睡眠導入薬は50人（25.8%）の患者で内服されていた。当院外来化学療法センター通院中患者のさらなる精神的サポートが必要である事が確認され、積極的な精神腫瘍医および緩和ケアチームの介入によって、精神症状を有するがん患者のquality of life（QOL）向上が望まれる。

P1-3.
がん化学療法施行患者の精神症状に対する脳機能検査を用いた検討

（臨床腫瘍科）
○横山　智央
（内科学第一）
安藤　恵子、大屋敷一馬
（精神医学）
村越　晶子、飯森眞喜雄
（外科学第一）
池田　徳彦
（社会人大学院2年内科学第一）
大里　洋一
（薬剤部）
宮松　洋信

がん患者の精神的苦痛や悩みは深く、適応障害やうつ病の発症はquality of life（QOL）を低下させる大きな要因であるとともに延命効果にも影響があると言われている。更には、がん化学療法によって引き起こされる慢性的な記憶力低下および注意力低下は“ケモブレイン（chemobrain）”と言われ、QOL低下を引き起こす原因の一つとして、近年注目されてきている。しかしながら、これまで化学療法を受けている患者の精神症状および脳血流量の変化について画像診断を用いて検討した報告は殆どない。今回我々は当院外来化学療法センターに通院中患者15人を対象に、fNIRS（functional Near-Infrared Spectroscopy：近赤外光脳機能イメージング装置）を用いて前頭野における脳活動の変化を測定し、うつ性自己評価尺度SDS（日本語版Self-rating Depression Scale）によるスクリーニングを行い、精神症状および化学療法による影響について検討を行った。SDSにて適応障害が疑われる患者では、言語流暢性課題によって前頭前野の背外側面前方にて酸化ヘモグロビン[oxy-Hb]の低下が認められ、記憶力および注意力低下を訴えた患者では前頭前野の[oxy-Hb]低下が認められた。がん化学療法施行患者に対するfNIRSを用いた精神症状の早期診断および重症度の測定を行い、積極的な精神腫瘍医および緩和ケアチームの介入によって、精神症状を有するがん患者のQOL向上が望まれる。